
キミは太陽

karinko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミは太陽

【Nコード】

N8607Z

【作者名】

karinko

【あらすじ】

東京から転校してきた内気な少女、菜ノ花。
いつも笑顔で、かなりの天然な少年、光。
しっかり者で少しきついが素直な少女、恵美。
いつも冷静だが、優しい少年、悠人。

4人の高校生活を描いた青春物語。

プロローグ 菜ノ花 side

10月の終わりごろ。

少しずつ冬の足音が聞こえてくるような、そんな季節。

太陽みたいに明るい、キミに出会った。

私は笹川菜ノ花。

一週間ほど前、とある事情で東京の高校から大阪の高校に編入してきた。

…入学して一週間がたつのに、まだ友達がいらない。

というのも、（自分で言うのも悲しくなるけど…）私がすごく人見知りが激しくて、内気なことが原因

だ。

今は下校時刻。

「はあ……」

私は小さくため息をつくと玄関をでた。

ふと、ガラスに映った自分の姿を眺める。

そこにあるのは、メガネをかけた地味で暗そうな女子生徒。

更に深くため息をつく。

私はうつむいて、とぼとぼと歩き始めた。

ちょうど運動場の前を通り過ぎようとした時。

ドンッ！

何かに押されて、体が後ろに傾いた。

突然のことだったので支える間もなく、地面に尻もちをつく。

何が起こったんだろう??そう思って顔をあげると、

「ごめん!! いける!？」

男の子が、心配そうに私の顔を覗き込んでいた。

どうやらこの男の子とぶつかってしまったらしい。

…あれ??見たことがある顔。

「いえ、こちらこそすいません…」

私はそう言いながら男の子の顔をあらためて見た。

明るい栗色の髪。

大きな猫目。

服装から男の子と判断したけど、女の子だと思えばそう見えないこともないような中性的な顔立ち。

入学してから一週間の記憶をたどってみる。

…ああ、そうだ。

この子とはたしか、同じクラスだ。

緊張のせいで、クラスのメンバーをよくみていなかったからおぼろげにしか思いだせないけど、たしかそ

うだった気がする。

「良かった！んじゃ！」

男の子は私に背を向けて、運動場に向かった。

私も制服についた砂を軽く払い、校門の方に向き直る。

「…あれ??」

ころころ…

目の前にサッカーボールが転がっていた。

これ…さっきはなかったような…

そつとそれを拾い上げる。

もしかしてさっきの子が落としていったんじゃ…！

私は慌てて運動場の方に向き直り、なんとか声が届きそうな距離にいた男の子の背中に向かって声をかけ

た。

「あのっ！！」

精一杯声をだしたつもりだが、いまいち大きな声は出なかった。

それでもなんとか男の子には届いたようだ。

彼は足を止めてこちらを振り返った。

「ん？オレ？？」

きょとんとして自分を人差し指でさしながら首をかしげる。

「これ…違いますか…？？」

私はおずおずと男の子にボールを差し出した。

ぱつと男の子の顔が明るくなる。

「そう！なんか手がさみしいと思ったら、落としてたんか！！」

男の子はこっちにかけよってきて私の手からボールを受け取った。

そして、

「ありがとう！！」

私にむかって、にっこりと笑った。

驚いて目を見張る。

それは私の16年間の人生の中ではじめてみた、眩しいほどに明るい、太陽みたいな笑顔だった。

プロローグ 菜ノ花side（後書き）

前投稿からだいぶあきました！

ので、新しい連載を始めます！

文章力もなく、へたな物語ですが、読んでいただけたらうれしいです

出会い 菜ノ花 side

「あっ！昨日の子や！！」

教室に入るなり、昨日の男の子が少し驚いたように言った。

いきなりのことですでしていいかわからず、とりあえず小さく頭を下げる。

私が席につくと、彼は私の机に手をついてにつこりと笑いながら話かけてきた。

「同じクラスやってんなあ！全然知らなかった！！てか、転校生！？」

「は、はい…一応…」

「やっぱり！！じゃあ今日転校してきたばっかやな！大変やと思うけど頑張りや！」

「えっと…」

彼は全く悪気のない無垢な笑顔を私に向けている。

一応転校してきたのは2週間前なのだが…

まあ、こんなに地味で目立たない女の子なんて、いくら転校生でも覚えていなくて当然か。

バシッ！

私が頭の中で納得していると、突然女の子が彼の背中を叩いた。

「おまえは何失礼なこといってんねん！この子は2週間前に転校してきた笹川さんやろ！！」

男の子は背中をさすりながら首をかしげた。

「え？？そうやって？？」

女の子はため息をつく、私に向かって笑いかけた。

「ごめんなあ。こいつがえらい失礼して。」

金髪にツインテールで、女の私でも思わずどきっとしてしまつようなすごく大人っぽくて美人な女の子。

「い、いえ…そんな…」

私が首を振ると、女の子は笑いながら手を横に振った。

「そんな緊張せんでもええで！あつ！ウチ、三浦恵美！遅くなったけどよろしく！！んで、ついでにこ

のアホは西崎光や！一応覚えといたって！！」

早口で話されたので驚きながらも女の子がしてくれた自己紹介を整理する。

「え、えつと…三浦さん、と西崎くんですね。」

私は女の子と男の子を順番に見て確認した。

「そんな名字にさん付けなんかせんでええって！恵美でええよ！」

女の子…三浦さんは笑ってそう言ってくれた。

「じゃあ…恵美…ちゃん？？」

他の女の子を下の名前で呼んだのはいつぶりだろう？？

緊張して、少し声が小さくなる。

「んっ！それでええよー！」

三浦さん…いや、恵美ちゃんは満足そうにならずいてくれた。

「えー！じゃあオレも名前で呼んでやあ！」

突然西崎くんが割って入ってきた。

いや、女の子を下の名前で呼ぶのも緊張するのに…男の子はちょっと…

「ええと…」

私が苦笑いで首をかしげていると、恵美ちゃんは西崎くんの肩をこづいた。

「笹川さんの自己紹介のとき爆睡してたやつにそんなふうに読んでもらえる資格があると思ってるんかおまえは!!」

「思う!」

「そつやな、おまえやったら思うな。聞いたウチがアホやった。」

「あつ!そういえばオレ、そんなとき夢の中でサッカーのシュート決めてたで!」

「何をどや顔しとんねん!どうでもええわ!」

2人が言い争いを始めたのをみて、私は思わずくすりと笑った。

なんだろう??

これは関西特有なのかな??

なんだかテレビの漫才を見ているみたい。

突然2人の言い争いが止まった。

あれ?

笑ってはいけない雰囲気だったのだろうか??

私は慌ててぺこりと頭を下げた。

「!」、ごめんなさい!笑ってしまつて!」

「名前…」

私の謝罪に返事もせず、西崎くんがぼそっとつぶやいた。

「名前！！なんやつけ？？」

突然明るい声で尋ねられて、私は戸惑いながら答えた。

「さ、笹川菜ノ花ですけど…」

「んじゃ菜ノ花！！」

いきなり下の名前を呼び捨てで呼ばれた。

西崎くんにとっては普通なのかもしれないが、思わずどきっとしてしまふ。

「よろしくな！！」

私はまた、西崎くんの顔に、

あの笑顔を見た。

出会い 菜ノ花 side (後書き)

タイトルは「出会い」にしましたが、光と菜ノ花はプロローグに
応出会ってますね(; _ _)

まあ、今回は恵美との出会いと光とのあらためての出会いとい
つとで(*^ _ ^*)

部活 菜ノ花 side

あの日から恵美ちゃんや西崎くんが頻繁に私に話しかけてくれるようになった。

私も初めは緊張していたけど、少しずつ2人との会話に慣れるようになってきた。

そんなある日……

「菜ノ花は部活とかやれへんのー??」

突然恵美ちゃんに尋ねられた。

「部活…ですか??」

今まで部活には入ったことがない。

一応興味はあったりするのだが…

なんとなく自分が入ってはいけない世界のような気がしていた。

「特に…考えてはいませんが…」

でも…

「…少し、興味はあります」

私はうつむきながら小さな声で答えた。

恵美ちゃんはそんな私をみてにつこりと笑う。

「じゃあ、今日の放課後一緒に運動場きてくれへん?? 紹介したい部活があるねん!!」

放課後、恵美ちゃんに連れられて私は運動場へ向かった。

「えっと…何の部活ですか??」

「あれ!!」

恵美ちゃんは元気よく運動場の真ん中の方を指差した。

そこでは何人かの生徒がふた組に分かれてボールを追いかけている。

あれは…

「サッカー部…ですか??」

「うん! まあ選手じゃなくてマネージャーの方やけど!!」

マネージャー!!

予想外の言葉が頭の中で大きく響いた。

「マ、マネージャーって…あの、暗黙の了解で美人しかねないという…有名な、あのマネージャーですか??」

「いや、そんな大げさなんとちゃうよ!!」

け、けど…

私のイメージではそうとしか…

とても私のような地味な人間がなれるようなものではない気がします…

私が当惑していると、恵美ちゃんは手を横にふって笑った。

「そんな困った顔せんでも！別にやりたくなかったらやらんでもええし！ただ、サッカー部のマネージャーがウチしかおらんくて仕事が大変やから手伝ってほしいなって思っただけやで！」

「え!!恵美ちゃんしかいないんですか!?!」

サッカー部のマネージャーといえば、結構な人気職だったような気が…（以前の学校調べ）

「いや、募集者はいっぱいおるんやけど…みんな光と悠人目当てでやる気ないやつが多いというか…」

恵美ちゃんはため息をついた。

西崎くん??

ああ、そうだった。

そういえば初めて西崎くんと出会ったとき、彼はサッカーボールを持っていた。

そうか、西崎くんもサッカー部なんだ。

「西崎くんって女の子に人気があるんですか??」

なんとなく私が尋ねると、恵美ちゃんは苦笑いした。

「んー…まあ、あいつは誰にでも愛想ふりまいとるからなあ…。それに…」

恵美ちゃんはふとグラウンドの方に目を移した。

つられて私もグラウンドへと目を移す。

「あいつ、サッカーめっちゃ上手やから」

恵美ちゃんに言われて、私は西崎くんに焦点を合わせた。

ちょうど西崎くんがボールを持っているところだ。

前には4、5人の相手チーム。

西崎くんはボールを止めてじっと前をみると、突然動きだした。

そして軽々と相手役の選手をぬいて、シュートを決める。

「…すごい」

サッカーのことは全然わからないけど、なんとなくそう思った。

まわりの人が西崎くんのまわりに集まって、西崎くんをこずいたり背中を叩いたりする。

西崎くんはその中心でいつものように明るく笑っていた。

「まあ、あんな感じやから、かつこいいとか思う女の子が多いみたいやなあ」

「そうなんですか…」

私が感心しながらあらためて西崎くんを眺めていると、ふとこちらをみた彼と目が合った。

「菜ノ花や!!」

西崎くんは運動場の端にいた私たちにも聞こえる程の大きな声で私の名前を呼ぶとこちらにかけよってきた。

「どうしたん!?!なんでおんのー??」

「ウチが誘ってん!菜ノ花にマネージャーせーへんか?」

「マネージャー!!」

西崎くんは目を輝かせると、私の手を握った。

「!!」

思わずどきつとする。

けど西崎くんは全然気にしていないようだ。

「やる！オレ、菜ノ花にマネージャーやって欲しい！」

「…えっ」

私は驚いて目を見張った。

今まで部活に入るのはずっと気が引けていた。

ましてやマネージャーになるなど考えたこともなかった。

『なんでこんなやつが入ってるんだらう？』

他の人にそう思われるのが怖くて。

でも西崎くんは私が部活に入るのを望んでくれている。

うれしくて、自然とほおがゆるんだ。

「…はい！」

西崎くんがにつこりと笑う。

「やった！んじゃ、さらによろしくやな！」

「うちもめっちゃうれしいわ！菜ノ花やったら真面目にしてくれると思うしうちも楽に…恵美…！」

突然恵美ちゃんの言葉を低い声が遮った。

「げっ！悠人！」

恵美ちゃん後ろを振り向くと少し顔をしかめた。

「げっ！とはなんやねん！おまえ、マネージャーの仕事ほっぽって何をゆうちょにしゃべっとるんや！」

私も後ろを振り向くと黒髪の男の子が腕組みをして恵美ちゃんを見下ろしていた。

切れ長の目に整った鼻と口。

ずいぶんきれいな男の子だな…。

そう考えて、ふとさつき恵美ちゃんがサッカー部のマネージャー志望の大部分が西崎くんともう一人、

『悠人』という人を目当てにしていると言っていたことを思い出した。

ということは、この男の子が『悠人』くん？？

「ゆうちょにしゃべっとるわけとちゃうわ！おまえらがウチに無理なことおしつけてくるから、仲間ふやそと思って勧誘してるんや！」

「ん…？？勧誘…？？」

男の子は私の方を見た。

「ちゅーことはおまえがマネージャー希望か??」

「え、えつと…希望というか…」

いきなり見つめられて緊張してしまい、おどおど答えると、男の子はふいと私から視線を外した。

「まあええわ。とりあえず恵美借りるでー」

そう言つて恵美ちゃんのツインテールの片方をひっぱる。

「ちょ！悠人！離せつて！」

抵抗もむなしく、恵美ちゃんは連れていかれてしまった。

「…ええと、いいんですか??」

私が啞然としながらつぶやくと、西崎くんはにこにここと笑いながら言った。

「…まー、恵美がゅーにつれていかれんのはいつものことやから」

「そつなんですか!??」

ゆ…ゆうとくん??でしたよね?

あの男の子はいったいどういう人なんでしょうか…??

キンコーンカーンコーン…

下校時間を告げるチャイムが鳴った。

「あー、もう帰る時間やな。んじゃあかえろか！」

「えっ！！恵美ちゃんはいいんですか！？それに練習は…」

「ゆーとがきたってことは練習もう終わったってことやし！恵美は…ゆーとがおるから大丈夫やる！」

西崎くんはすつと立ち上がると私に向かって手をふった。

「じゃあ着替えてくるから待っててな！」

「は、はい…」

私はうなずくとぼんやりと西崎くんを見送った。

…って、あれ？？

『待ってて』ってことは『一緒に帰ろう』ってこと…だろうか。

私と…

一緒に帰ってくれるの…？？

西崎くんは私のことを『友達』って思ってくれてるのかな？？

そう考えるだけでうれしかった。

今までそんなふうにもらえてると思える人があまりいなかったから。

…とりあえず、帰り道ではそそのないようにがんばろう。

そう誓って軽く右手でガッツポーズを作っていた時。

突然風が吹いて風が舞い上がった。

「つつ!!」

グラウンドの砂が舞い上がって眼鏡の間をぬい目の中に入った。

と、とりあえず洗わなければ…

そう思って私はすぐ近くにあった水道に向かった。

なんとか砂をとりだして眼鏡をかけようとしたとき、

ざっ…

近くで何かが動く気配がした。

「西崎くん…??」

視界がぼんやりとしていて見えない。

私は眼鏡をかけようとした…だが、いきなり両手をつかまれ、それ

を阻止される。

ぼんやりとした視界の中のすぐ近くに西崎くんの顔が見えた。

じつと私を凝視をしている。

「えっ…?? なんですか…??」

突然のことで心臓がどきどきとする。

な、なんだろう??

私の顔に何かついているのだろうか??

西崎くんはしばらく私の顔を凝視したあと、大きくうなずいた。

「うん！」

そしてぱつと明るく笑う。

「菜ノ花は眼鏡とってる方が可愛いなあ!!」

西崎くんの行動を見ていて気付いたことがある。

西崎くんは本当に何も考えずにこういうことを言ったりしたりする。

わかっているのに心臓が強くなった。

「ってことで眼鏡没収や！明日からコンタクトな！」

西崎くんはそういつて私の眼鏡を取り上げた。

…可愛いなんて言われたのは何年ぶりだろう??

突然以前の学校でのこと、中学時代のことを思い出した。

『ブス!』

クラスメイト達が口々に私にそんなふうな言葉を浴びせる。

人をあざけるような、嫌な笑顔。

けど、目の前の少年は純粋な笑顔で私のことを『可愛い』といってくれた。

「…はい!」

今日これから、さっそくコンタクトを買いに行こう。

私はそう誓い、大きくうなずいた。

部活 菜ノ花side（後書き）

サッカーのことはあんまり詳しくないのでおかしな点があれば追及してほしいです（；――）

悠人登場ですよ！でもまだこの時点では菜ノ花は悠人の名前をはつきり知らないということ…（*^―^*）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8607z/>

キミは太陽

2011年12月29日22時00分発行